九州大学学術情報リポジトリ
Kyushu University Institutional Repository

日本民間信仰における“ハレ”、“ケ”、“ケガレ”の観念とその構造

波平, 恵美子
九州大学

https://doi.org/10.15017/2231510

出版情報：九州人類学会報. 2, pp.5-7, 1974-10-01. 九州人類学研究会
バージョン：
権利関係：

KYUSHU UNIVERSITY

日本民間信仰における“ハレ”、“ケ”、“ケガレ”の観念とその構造

九州大学　波平　恵美子

1.

日本の民間信仰の内容は一般に複雑で多様な形態を持つと言われている。しかし、そのような複雑で「重層的」だと言われる表面の現象の基底には、何か明確な構造があって、それが日本の民間信仰を特徴づけ、一般の人々の生活の中で生き生きと機能させているのではないかと考える。信仰現象が多様であり、複雑であると言う事は、信仰要素が雑多に人々の信仰生活の中にあると言う事を意味しない。例えば「エビス信仰」という一つの信仰要素は全国的に見られ、その信仰内容は一般性を持つと同時に、個々の地域社会において微妙な食い違いが見られる。あるいは「犬神信仰」にしても犬神筋の家がある社会とない社会とでは、また地域社会の中で犬神筋の家数の占める割合が大きいか小さいかによって信仰がわずかずつでも違って来ている。極端な場合には同じ犬神信仰地帯で隣接する部落ごとに信仰が少しずつ違っている事がある。このような場合、エビス信仰や犬神信仰という一つの信仰要素がそれぞれの地域社会の民間信仰の全体構造の中で異なる組み込まれ方をしている事が考えられる。

発表者は研究の第一段階として各地域社会において民間信仰の全体的な構造がどのように決定されているかを明らかにしようと試みる。それにはまず構造を見きわめる上での分析の道具としてのモデルを設定したい。日本民俗学においては、しばしば“ハレ”という観念を“ケ”の観念と対置させて論じてきた。つまり祭の日をハレの日として、日常の労働に従事するケの日と対置させ、祭や結婚式などに着る晴着を労働着と対置させて論じてきた。このように非日常的で神事に関する事柄を“ハレ”という観念でとらえ、これに対して非宗教的な日常的な事柄を“ケ”の観念でとらえてきた。つまり、“ハレ”と“ケ”とは相対立する一対の観念として考えられてきた。ところで、日常性、世俗性を示す“ケ”の観念と対立し、しかも“ハレ”の観念とも異なるもう一つの観念がある。それは“ケガレ”の観念であって、民間信仰の中の重要な観念と考えられる。例えば葬式の行なわれる日は遺族やその親族、あるいは地域社会の人々にとって、それは日常普段の日ではない。しかし葬式に関する事は神事とは厳しく区別され、全く質の異なる事柄として人々に受け取られている。つまり葬式の行なわれる日やそれに用いられる道具、あるいは年忌法要に関する事柄はハレの観念ともケの観念とも異なるケガレの観念に関係している。従ってここでハレ↔ケ、ケガレ↔ケ、ハレ↔ケガレという互いに対立する観念が、日本民間信仰から取り出す事ができる。フォークロアの研究者の中にはケガレはケの亜観念と考えたり、ケガレをハレの亜観念と考えたりする人々があるが分析の道具としてはそれぞれを独立

した観念として取り扱う方がより有効であると考える。これらの観念をモデルとして取り扱う場合は民間信仰の実体の中で、それぞれの観念がどのような関係にあるかという事とは別の問題として考えたい。日本民俗学の一般的な傾向に従わず、また従来の「聖」と「俗」の観念を用いないのは、聖と俗を固定的な関係として考える今までの傾向では多様な日本の民間信仰をとらえるには不適当だと考えるし、また宗教観念における清浄性と不浄性の対立を曖昧なものとして考えるのでは民間信仰の本質に迫るには不適当だと考えるからである。

2.

次に以上のモデル、つまり（ハレ↔ケ）、（ケガレ↔ケ）、（ハレ↔ケガレ）の対立観念から成る、を用いて発表者がこれまで直接調査をし、資料を集めた地域社会の民間信仰を分析の対象とする。

（事例A：長崎県壱岐郡勝本浦）

勝本浦は活気に満ちた純漁村であり、その民間信仰では氏神信仰が強調され、浦内の数多くの神社のうち漁業や漁師の守護神とされている神社の祭典は大変大がかりに行われる。その外個々の漁業者は船霊さまを熱心に信仰し、日々の生活においても、年中行事の際においても船霊さまは特別注意深い信仰の対象となっている。この地域社会での民間信仰で顕著なのは常態からハレの状態へ高めるような信仰行為である。例えば特別ケガレがかかったのではないけれども毎日の出漁の際には船霊さまをまつった船の聖所に酒を注いで清め、海水をかけて船体を清める。また正月には氏神々社の神官が浦内の５００隻に余る漁船のお祓いをしてまわる。こういうハレの観念の強調は、水死体を「エビスさま」として信仰する行為にも示されている。死や死体は穢れたものとして強く排けるのだが、水死体を捨い上げ、一応の儀礼をすませればそれは不浄なものでも危険をもたらす不吉なものでもなく、むしろ漁師を守護し豊漁をもたらすエビス神となると信じている。

（事例B：高知県谷ノ木部落）

谷の木部落は犬神筋の多発地帯の中にあり、また憑き祟りの信仰の強い地帯にある。彼らの信仰対象は勝本浦の氏神や船霊さまのようにあらかじめ決っているのではなく、大げさに言えばそこらにころがっている石や日頃気にもせず思い出しもしない山の中の墓が深い信仰の対象になる可能性を持っている。つまり、ある人が病気になり部落在住の祈禱師の所へ病気の原因を尋ねに行く。そこで患者は祈禱師から墓や塚や山の神が憑いたり祟ったりした事を造げられる。時には生きている人の生霊や、死霊が憑いたと知らされる事もある。祟りや憑きの直接の原因は病人やその家族がそれとは知らずに不敬行為を行なったり、あるいは信仰対象として充分な儀礼の対象としなかったり（「まつり不足」と言う。）したためである。つまり信仰対象は常に“ケガレ”の状態で立ち現われる訳で、そのケガレの状態を祓いのけ、病気が治ってしばらくするともはや信仰の対象ではなくなって、以前と同じ様に放置される。つまり信仰の対象はケガレの状態で、しかも病気（死と同様にケガレの観念に係わっている。）を契機として人々の信仰の対象となり得る。また個々の信仰の対象は一定していず予測できないものではあっても、祟ったり憑いたりするものは墓や位牌、死霊など死のケガレに関係するものが多い。こういったケガレの

観念の強調は、この部落の約半数を犬神筋の家が占めており、部落の人々が犬神筋の人々を「クロ」非犬神筋の人々を「シロ」と呼ぶ事と、またかつては同火、同食を忌避した事と無関係ではないと考える。

（事例C：大分県山野部落）

山野部落のある地帯は全体に真宗勢力が強く、かつ第二次大戦までは彦山山伏のカスミの領域内にあった。また現在でも憑き祟りや山の神信仰の顕著な地帯である。大野部落に現存する真宗寺院は約３５０年前に建立された。この地の民間信仰において顕著な事は仏教的なものと土着の信仰あるいは氏神信仰との対立であり、代々の真宗僧侶による民間信仰の排撃と、それに対する村の人々の側の氏神祭祀からの僧侶の排斥、あるいは部落１６０戸中２７戸を占める「神葬祭家」、つまり寺籍を持たず神道で葬式を行う家と住職家との対立が見られる。この事が彼らの生活の中で仏教と神道との区別をケガレとハレの観念のはっきりした区別と重ねてとらえる行為に示される。例えば氏神に関する行事には僧侶は村の要職にありながら参加しないばかりでなく神社の近辺にも近よらないとか、部落在住の祈禱師は天照大神を呼ぶ時は紫の色の衣を着るが、死霊のお祓いをする時は黒い色の衣を着るとか、あるいは最近亡なった人の位牌は仏壇の中の一番下の段に置き、４９日の法要がすむと次の段に置き、年忌を重ねた順に上の段へ移すといった行為が見られる。つまり仏教対神道及び土着の信仰との対立（信仰の次元のみならず社会的関係においても）がハレとケガレの対立の強調を導いている。

以上３つの事例はハレ、ケ、ケガレの観念の関係が比較的とらえやすい地域社会単位の民間信仰であったと考えられる。これらの構造を明らかにする事によって、各地域社会の民間信仰の諸相をより明らかに調査の過程の中から取り出す事ができた。また山の神や氏神信仰、屋敷神やイワイ神の信仰など全国的に見られる信仰が、一般に考えられているよりはるかに複雑である事がわかった。“平均的”な信仰と比べて見てそれらに何らかの差異があった場合、それを単に信仰要素のバラエティーとしてかたずける事はできないのではないか。その差異は、他の信仰要素との関係全体（発表者の言う「構造」）の中で決定されるのではないか、と考えるようになった。発表者が提示した分析のためのモデルは一つの試案であり、以後通過儀礼や神社の祭礼など、分析対象をより限定して、このモデルを使って分析し、そのモデルとしての有効度を確かめたい。